

「台湾への臨床実習留学を経験した成果」

19211078

船越万由

留学期間 2024年5月26日～6月22日

留学先病院

1、2週目：國泰綜合醫院 Cathay General Hospital(CGH)

3、4週目：新光吳火獅紀念醫院 Shin Kong Wo Ho-Su Memorial Hospital(SKH)

台湾輔仁カトリック大学(以下 FJU)との交換留学生として佐賀大学から合計4人の学生で台湾に渡航し、FJUと提携する4つの民間病院のうち2つの施設で実習をさせていただきました。各診療科での学習内容を報告いたします。

5/27(月)～6/7(金)：「國泰綜合醫院」

○1週目：一般外科 General Surgery

CGHではFJUの学生15～20名が実習しており、私たちの実習開始日が現地学生にとっての初日でもあったため全員で病院のオリエンテーションを受けました。General Surgeryでは実習中の学生3名と共に担当患者の問診や手術の見学をさせていただきました。甲状腺・副甲状腺、乳腺、上部・下部消化管の手術を行っており、扱う領域が幅広いと感じました。二次性副甲状腺機能亢進症に対するparathyroidectomy+subcutaneous autoimplantationの手術を見学し、終了後にそのままオペ室のパソコンでレクチャーをしていただきました。別日にはpercutaneous ethanol injection therapyが実際に行われているのが興味深いと思いました。

控室で休憩している際、神経内科を実習中の学生に珍しい症例を紹介してもらいました。Sparganosisという寄生虫が脊髄にまで浸潤したことで突然下肢の麻痺が生じた一例で、X線検査で脊椎内で石灰化したsparganosisも見ることができました。十数年前まで寄生虫の多かった台湾でもなかなか見ない症例のようでとても勉強になりました。

○2週目：救急科 Emergency Medicine

CGHでは1日に200人以上の患者が救急外来を受診し、全員がまずは受付でトリアージされていました。受付のカルテで年齢、性別、症状やバイタルなどの基本事項を入力するとシステムによって自動的にトリアージがなされ、最も重症の赤タグは蘇生室に直行する形でした。台湾では病院側は救急車の受け入れ要請が来た場合は断ってはいけないと法律で定められており、先生方は日本の断る選択肢があることを羨ましがっていました。CGHは富裕層の患者が多いこともあってか、満床であることを通達してもどうしてもCGHに来たいと、書類にサインした上で搬送されてくる患者も多くいました。

EmergencyではFJUの学生2名と台北医学大学の学生1名が実習していたのですが、経鼻胃管、尿道カテーテル、ギプス固定から胸腔穿刺、縫合、傷口の焼灼まで学生が経験させてもらっており驚きました。



6/10(月)～6/21(金)：「新光吳火獅紀念醫院」

○3 週目：一般内科 General Medicine

General Medicine では主治医(VS)、研修医(PGY)、NP の 3 人 1 チーム、全 3 チームの体制で動いていました。各 VS は循環器、呼吸器、泌尿器のサブスペシャリティを持っており、お互いに相談しあって和やかな雰囲気でした。病床数は約 45 ですが、台湾全体で看護師が足りておらず、満床にできるほどの体制を整えることは難しいそうです。また、ほとんどの患者には家族やケアのために雇われた外国人労働者が横についており、付き添い入院が可能になっていました。印象的だったのは患者の離床を検知するために腕に鈴が付けられていたことで、日本では離床センサが主に用いられていることを紹介すると興味を持っていただけました。

○4 週目：小児科 Pediatrics

Pediatrics では外来診療、病棟回診、NICU 実習を行いました。月曜日から水曜日までご指導くださった王先生は 10 年ほど日本で働いていたこともあって日本語が堪能で、ご専門のアレルギーや入院中の患児について詳しく教えていただきました。SKH のエリアではマイコプラズマが流行しているそうで入院患者にも多く、cold agglutinins test の様子を見せていただきました。新生児の病棟でも実習を行い、生後 2 日の児に対して身体診察や反射の確認をさせていただきました。病院内では α -サラセミアの患者を見る機会が多かったのですが、台湾の人々を客家、漢人、原住民に分けたうち客家の人々は G6PD 欠損によるサラセミアが多いと教わりました。最終日には Pediatrics を実習中の FJU 学生によるプレゼンテーションがあったのですが、一部のスライドを分けてもらい発表もさせていただきました。

今回の実習を通して最も気になったのはカルテなどの病院システム、そして医療保険適応の違いでした。過去の報告書にも記載があるとおり、台湾の保険証「健保卡」は他の病院での受診歴や内服薬を確認することができ外来診療や救急の現場では特にとても便利だと感じました。一方で、6ヶ月前までの情報しか参照できない、病名はわかっても詳細な検査内容までは参照できないなど、万能ではないことも分かりました。また、今回実習した CGH と SKH では自分の iPad などのデバイスでカルテを見ることができるととても便利だと感じました。セキュリティ面で不安が残りますが、アクセスのログが残ることや利便性が上回ることからその選択をとっているそうです。このように、台湾の医療は情報、効率化の点でとても進んでおり働きやすそうだと感じる一方、日本の医療の配慮の細やかさや過去の事例から改善していったと思われるシステムの嚴重性に信頼を覚えるなど、双方の医療の良さに気づくことができました。

医療保険制度については、台湾は日本と同じように皆保険でしたが、保険でカバーされない検査や処方も多い印象でした。また、漢方などの東洋医学は専門の資格を持った医師によって、西洋医学とは異なる施設でしか用いることのできないようでした。保険適用範囲が広く漢方も用いることのできる一方、自費診療行為は同時にできない日本との違いを感じました。

全体を通して

今回の交換留学では病院での臨床実習で学んだことはもちろん、現地の学生との交流がとても貴重な経験となりました。比較的時間に余裕のある中、対等な立場で医療のみならずお互いの生活や価値観に

ついて語り合うことは学生でしかできないことであり、大学在学中に経験することができて良かったと強く思いました。また、FJUは学年全体の仲がとても良く、一芸に秀でた学生や論文制作に勤しむ学生、留学に行く学生も多くおり大変刺激になりました。

参加前は書面でしか勉強したことのない医学用語が使えるか不安だったのですが、実際は予想よりもスムーズに用語を使えたことは自分の自信につながり、いずれは自分の予想の及ばない医療先進国やさらに高い英語スキルが求められる場にもチャレンジをしたいという気持ちが高まりました。また、台湾の医学生や医師の多くが、咄嗟に求められても英語で難なく会話が可能なほど全体の英語教育が高いことに驚き、自分も英語や医学の勉強に更に力を入れようというモチベーションになりました。

最後になりますが、今回の交換留学に際してご尽力くださった佐賀大学のスタッフの皆様、台湾での実習にてお世話を下さった輔仁大学と各病院の先生方、佐賀大学および医学部同窓会・医学部後援会のご支援により実習に行くことができました。大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

学生番号 19211019 氏名 奥泉 類

実習期間 2024年5月27日～2024年6月21日

今回の実習で私は①医療英語を学んでいる学生・医療従事者が病院や会話でどのように使っているのか、②国外の病院を知る、③医学英語の向上、以上の3点を主な目標として海外臨床実習を行いました。

4週間の留学は私にとって初めての経験でした。この実習に参加する前、交換留学生との佐賀大学での交流を通して、彼らの学習に対する意欲の高さに刺激を受けました。台湾では医学を英語で学んでいるということは知っていましたが、それ以上に皆英語が堪能でした。そして自分の英語がどれほど通用するのか以前に、生活面でも不安がありました。

実際に参加したことで、4週間の留学は長いようであつという間で短いと感じるほどでした。輔仁カトリック大学の学生は関わってくださった学生全員が多才であり、改めて彼らの学習意欲の高さに刺激を受けました。私の英語能力は、日常会話でさえややおぼつかない程でしたが、実習では現地学生がその場で丁寧に翻訳してくれたため何とか内容を理解することができました。

今回の実習で私は①患者の状態を簡単にではあるが医療英語で説明できる程度の成長ができた、②自分の知識不足を実感した、③視野が広がった、以上3点が大きな収穫だと思っています。

1 週目

1、2週目は國泰綜合醫院 Cathay General Hospital (以下 CGH) でそれぞれ Emergency Medicine (以下 EM) と General Surgery の実習を行いました。

主に現地の学生と行動することが多く、彼らもこの週が CGH での初めての实習であったため、彼ら全員が参加する病院全体のオリエンテーションやレクチャーにも混ぜてもらいました。具体的には病院見学、「医療品質と病人安全について (Google 翻訳)」「PPE の着用」「カルテの使用方」など佐賀大学の実習前オリエンテーションと似たレクチャーを受けることができました。レクチャーは中国語のスライドが主でしたが、先生によっては英語で説明してくださいました。

EM の実習では、主に救急外来の見学とレクチャーがありました。救急外来の見学では、バイク等による交通外傷が多く創部の縫合をみる機会が多くありました。先生の責任の下で clerk (学生) が実際に患者さんの縫合をさせてもらえるそうです。また、EM の Internal Medicine で受診していた患者さんが翌日には Resuscitation room での管理が必要になるほどの末期の甲状腺悪性腫瘍であった、という症例が印象に残っています。レクチャーでは、聴診法の解説を受けた後、Observation Area (入院待ちの待機ベッド) の異常な呼吸音がみられる患者さんの元へ行き、実際に聴診するという経験が印象的でした。

2 週目

General Surgery の実習では、主に手術見学、モーニングミーティング、術前後の患者の問診・診察を行いました。手術見学では臍腫瘍生検や乳腺腫瘍生検、イレウス解除などを見学しました。実際にガウンを着て術野に入ることはできませんでしたが、現地の学生と見学し、術野で先生が説明した内容を翻訳してくれました。手術室の雰囲気は日本との差はほとんど感じませんでした。術前後の患者の問診・診察では、現地学生の担当患者さんを一緒に問診・診察しました。患者との会話内容を教えてくれたり、私が質

問いたい内容を患者さんに伝えてくれました。また、学生用カルテを現地学生と一緒に書く経験をさせてもらいました。メニューや選択画面のみ中国語で、他カルテの内容はすべて英語で記載されていました。モーニングミーティングでは、先生の症例報告や担当患者のディスカッションが行われ、我々のために全て英語で行っていただきました。

3 週目

3 週目からは CGH から新光吳火獅紀念醫院 Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital（以下 SKH）に移動し、General Medicine と Pediatrics の実習を行いました。

月曜日は Dragon Boat Festival という祝日だったため、実習は火曜日から始まりました。

General Medicine の実習では、主に回診、モーニングレクチャー、SICU 見学、カテーテルラボ見学がありました。回診では各グループごとの持ち患者のディスカッションをした後、それぞれの患者さんとその付き添いの家族に対して診察と検査結果の説明を主にされていました。SKH のカルテのデザインがとても見やすかったです。SICU では荘先生の心エコーを見学しました。荘先生は循環器が専門の先生で、カテーテル室の見学もさせていただきました。ケースカンファレンスでは中国語での説明でしたが、PGY（日本でいう初期研修医）の先生が後で内容を簡単に教えてくださいました。SKH の総合診療科は、複合的な疾患を持つ患者さんを受け持って治療し、他科や他の病院にコンサルトする立ち位置だとおっしゃっていました。

4 週目

Pediatrics の実習では、主に外来見学、NICU 見学、(学生) 回診、ケースカンファレンス、プレゼンテーションを行いました。

外来では、王先生の診察を見学しました。王先生はアレルギーを専門とされていて、アトピー性皮膚炎の患者が外来患者の 1/3 を占めているそうです。NICU 見学では、原始反射についての説明や各患者の疾患と現在の状態について説明をしてくださいました。朝のケースカンファレンスでは、アメリカからの帰国子女の先生が大変流暢な英語でレクチャーしてくださいました。スライドでわからない記載があったところは学生が後で聞きに行ってくれてとても助かりました。プレゼンテーションでは、学生の発表に混ぜてもらい、私ともう一人の留学生とそれぞれ発表する機会を作ってくれました。英語での発表経験はなかったのもとても心配でしたが、何とかこなすことができました。

まとめ

今回の実習を通して、やはり自分の英語能力の向上が必要だと感じました。知りたいことが聞けないことのもどかしさを今でも悔しく思います。病棟の先生は常に忙しいため、事前に準備した質問以外にも聞きたいことがあったけれどもできなかったことが何度もありました。この悔しさを決して忘れず次に生かします。この留学に参加できたことで、自分に足りない点、自分の置かれている立場、これから身に着けるべきことがより明確になりました。自分の視野を広げてくれた新たな仲間にも恵まれたことに感謝し、精進していきます。

謝辞

今回の実習に当たり、留学中お世話になった台湾の先生方や学生方、そして留学前から様々な面で助けてくださった方々に心よりお礼申し上げます。本当に充実した学びの 4 週間を過ごすことができました。

質問・調査事項

① Understand the characteristics of Taiwan's medical practice and healthcare system. I want to research the following.

The impact of Taiwan's “全民健康保險” (National Health Insurance) system, which corresponds to Japan's National Health Insurance, on patients and medical practitioners.

国民のほとんどが加入しており、患者が支払う医療費が少なく済んでいる。日本と同様の医療費財源の問題も抱えている。医療費については医療機関によって異なり、小規模なほど安くなっている。

How 「健保卡」, which is similar to Japan's “Maina” Health Insurance Card, improves the efficiency of medical examinations in Taiwan.

健保卡を専用ので読み取ることで画像情報、血液検査、診療記録等が参照できる。国民のほぼ全員が携帯しているため、病院を受診する際に基本情報をこのカードから即座に知ることができる。救急科でも、実際に交通外傷の患者に対して健保卡を機械で読み取り過去の検査画像を参照することで現在の問題点を挙げやすくなる良いシステムだと感じた。デメリットとして、詳細な情報が得られるのは同じ病院のみで他の病院からアクセスするには時間がかかる。過去数 6 か月分しか即座に参照できない。保存期限が存在する。

The effects on patients and medical practitioners of a mixed health insurance system, the combination of insurance-covered and private medical treatment, not allowed in Japan.

保険診療を受けつつ、お金に余裕のある人は自費診療を追加し、より良い医療が受けられるという制度。日本と比べ台湾では保険診療の範囲が狭いのだそう。その点からは、日本の制度と正確な比較はできないが一長一短であると感じた。

The position of Chinese medicine in Taiwan and its relation to Western medicine.

中醫師と醫師は別の資格であり、日本と異なり台湾の醫師は漢方などの処方できない。稀に 2 つの免許をもっている方もいらっしゃる。

Is it possible to prohibits overtime in Taiwanese hospitals? And if possible, what kind of work style they do.

医師に限らず、原則労働者は労働時間を 28 時間以内に収めるという法律が存在する。しかし、形骸的な側面があり、必ずしも守られているとはいいがたい。これは日本でも似た問題であり、台湾でも解決できているわけではない。

How they deal with the COVID-19 pandemic.

日本と同様、外部にテントを立てスクリーニングして陽性の患者専用の病棟ルートを確保した。また、台湾でコロナ初期に日本と比較した際、マスクの供給が政府によってコントロールできたため感染の拡大抑制につながったのではないかとのご意見をいただきました。

② Understand the system and methods of medical education.

Because the practice facilities for medical students in Taiwanese hospitals seem to be well-equipped, I would like to experience how the medical students learn there.

それぞれの病院に OSCE のステーションルームがあり、学生はそこで OSCE を受けるようだった。実際に OSCE の試験を受けることは叶わなかったが、評価方法は内部評価者のほかマジックミラーを通した外部評価者の 2 重になっていた。ほか Mini-CEX (佐賀大学の miniOSCE のような位置づけ)、DOPS (臨床的な手技の試験) などの試験が存在した。

I heard that many students participate in lively discussions in the lectures, and I want to be stimulated by joining such discussions.

EM 担当の先生のレクチャーでは、スライドの QR コードを読み取り、その場で質問に回答し、即座に回答がスライドに反映される形で学生の意見が見れるようになっていた。議論する上で大変効率がいいと感じた。

③ Understand the cultural and social backgrounds in Taiwan.

How religion influences medical practice, such as the fact that Christian hospitals in Taiwan do not allow abortions.

輔仁カトリック大学病院では、妊婦の胎児をおろすことが宗教上の理由で禁止されている。しかし、キリスト教の病院はやや珍しいため、他の病院ではそのような宗教的な制限はないことが多い。(SKH 内にムスリムのための祈祷室が設けられていたのは印象的だった。)

How religion and cultural beliefs are involved in the choices when elderly people are unable to eat or are in critical conditions. For example, gastrostomy for the elderly in Japan is a realistic issue, and Taiwan becomes aging society, too.

(質問内容が明確でなかったため少しずれた内容になる) 台湾でも高齢化は顕著であり、やはり病棟で見る患者の年齢層は高い。ご高齢の方は仏教徒であることが多いが、それによる医療行為の選択にバイアスがあるかは明確なことはわからない。

How doctors promote consultations to the patients who delay seeing a doctor due to their financial difficulties.

Family Medicine に準ずる質問であり、今回の実習では Family Medicine がなかったため聞くことができなかった。

Focusing on medical and information technology, research the reason why medical care in Taiwan is making progress rapidly.

NP (doctor's assistance) という、師の業務をサポートする業種が存在し、学生の病棟実習のサポートも行っていた。佐賀大学のクラークさんに当たるものだと考えられる。

気づき

・カルテがタブレットで見られるのは大きな利点だと感じた。セキュリティーのある Wi-Fi を通して関係者が病院内で閲覧することができるため、現地の学生に質問する際もタブレットをみながら教えてくれたので、常に最新の情報が手元にある状態なのは良い環境だと感じた。日本でも似たようなシステムの病院は存在するそうだが、まだまだ一般的ではないと思われる。

・実習するにあたり、一緒に回る現地学生の存在は大きいと感じた。今回 3 週目の General Medicine では現地学生は回っておらず実質留学生 2 名のみの実習となったため、普段の学生の実習がどのようなものなのか知ることができなかったのが心残りである。

・今回は今までと異なり 4 週間で 2 病院 4 診療科を回るスタイルとなったが、これは私にとって土地感を知り病院に慣れるのに十分な時間であったため、1 週間で移動するより実習に集中できると感じた。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

佐賀大学医学部 6 年生

学籍番号：19211008 内山悠

私は今回輔仁カトリック大学医学部臨床実習交換留学プログラムに参加し、大変貴重な経験をさせていただくことができました。その成果を以下の2つに分けて記入させていただきます。

<実習内容>

・外科 in Fu Jen Catholic University (5/27~5/31)

1 日目はオリエンテーションに参加して、担当の先生と台湾の医療事情について話した。台湾でも日本と同様のカリキュラムで成長していくことを学んだ。5 年生、6 年生は日本の実習プログラムに比べて自由に診療科を選ぶことができ、自由に学ぶことができる。外科では、清潔操作が日本とは少し違っていたり、雰囲気は違っていたり、刺激を受けた。医療行為ができないため、手術見学が主であるが、輔仁カトリック大学の外科は甲状腺、乳房、心臓血管外科、一般外科の症例を全て担当していた。日本の大学病院だと細分化されているが、輔仁は 399 床以下の病院であることもあり医師の人数が少ないのかもしれないと感じた。外科では腹腔鏡下胆嚢摘出術をいくつも見ることで、基本的に術式も日本と同じで、先生方が丁寧に説明して下さった。

・小児科 in Fu Jen Catholic University (6/3~6/7)

小児科では、様々なレクチャーを英語でもらった。小児の発熱、痙攣、てんかん、肺炎に関するレクチャーだった。台湾の先生方は英語でレクチャーをされていて、正直理解できないことが多くあった。しかし、学生はみんな聞き取ることができていて、かつ正確に先生に英語で返答していた。先生方が回診をしながら患者さんの病態を説明してもらい、マイコプラズマ肺炎が大変多く、台湾ではありふれた疾患とのことだった。

・小児科 in Sin Gon Hospital (6/11~6/14)

輔仁カトリック大学の医学生 3 名と一緒に実習を行った。新光呉火獅記念病院は輔仁カトリック大学よりも大きい病院であるため、小児科の病棟病床数も多かった。日本に比べて、肺炎の症例数が多く、大きな基幹病院でも重症例のみならず **common disease** の割合が大きいことを知った。また、日本と台湾の新患外来で行っている問診と身体診察をお互いに紹介し、その違いを学んだ。台湾の学生のプレゼンに参加させていただき一緒に発表した際には、症例に対しての知識や英語論文を引用した考察のレベルの高さに驚いた。「坐月子 (ズオ ユエズ)」という台湾特有の産後の習慣に沿って、母親が産後の体を休めるための病院と宿泊施設が合体した「月子センター (月子中心)」にも訪れ、そこに宿泊している新生児、

乳児の健康状態チェックに参加した。台湾の文化に影響された特有の医療行為を見ることができた。

・総合診療科 in Sin Gon Hospital (6/17~6/21)

基本的に1つのチームに参加させていただきながら、担当していただく先生についていく形で実習に参加した。先生の専門分野が肺を主とした胸郭であったため、呼吸困難や息苦しさ、発熱などを主訴とする患者さんを見ることが多かった。患者さんの状態把握や情報共有をチーム内で行い、その後回診を行うという流れは日本と同じであった。中国語で患者さんと話しているが、他の先生方がそれを英語で説明していただき大変勉強になった。

<実習を通じて感じたこと>

留学・学習・国際理解への意欲について参加前後での変化について、次の海外留学への関心について交えながら以下に記す。

参加前後で、私の心境は大きく変わった。台湾での臨床留学を通して、海外の学生の医学に対する貪欲さ、医療の共通点、自身の生きてきた世界の狭さを知るとともに、日本の素晴らしさや自身の環境のありがたさ、自身の長所にも気づくことができた。台湾の先生方や学生は本当に親切で、私たち日本人を快く迎え入れてくださり、医学部についてだけでなく文化や慣習、歴史について多くのことを教えてくださった。最初のオリエンテーションにて、院長のお話では、医師にとって①様々な医療関係者や他の診療科の医師とをつなぐコミュニケーション能力、②自分自身を磨くことで身に付く技術、③正確で膨大な知識の3つが大切であり、①が最も重要であり、円滑なコミュニケーションが国が違っても重要視されていることを学んだ。

台湾での臨床実習を通して、私が台湾の学生より学ばなければならない姿勢が多くあった。まず医学に対する貪欲さである。学生・先生方も含め、環境に対して文句は言うことなく、目の前の医学を貪欲に学んでおり、周囲を気にせず意見を述べ、質問をしていた。次に英語力である。国際化・グローバル化がこれだけ進む中で、私は彼らに比較してほとんど英語を話すことができず、自身の言語能力の低さを感じた。滑らかに話すことができるのももちろんだが、医学英語を使いながら話していることに憧れを抱いた。言語を学ぶことはただ語学力が身につく、医学をより学べるだけでなく、その言語を使う国の文化や雰囲気、価値観を身につけることができ、私自身の成長になると感じた。医学英語だけでなく、日本語も少し話して聞き取ることができていて、日本アニメで勉強したらしいが正直それだけでそこまで話すことができることが驚きである。

一方で価値観が大きく広がっていることを感じる。台湾人は大変日本人を慕ってくれていて、何度も日本に足を運んでくれている。日本人の礼儀正しさやゴミひとつない街の綺麗さ、几帳面な正確、サービス業の充実、時代の最先端に行く東京や大阪、福岡などの流行など私たちが当たり前で気づくことができなかつたその姿に大変驚くとともにその日本で生

まれ育ったことを誇りに思った。医療の面においても、台湾の先生方は日本へ足を運び医学を学んでおり、日本の医学水準が高い位置にあり、それを生み出している先生方の優秀さを学ぶことができた。そして、その恵まれた環境に気づくことができるかできないかで人生の選択を大きく変化することを学ぶことができた。

私は、今回の留学を通して、次の海外留学に大変関心を抱いている。日本との距離が大変近い台湾でも大きな刺激と考え方の違いを学ぶことができた。そこからさらに広い世界を知ることは私自身の価値観を広げ、人として成長できると感じ、そこから得た自身の長所を人生や医師としての能力に活かしたいと考える。次回挑戦できるタイミングは医学部を卒業し、医師として働きながらの海外留学になると考える。研究目的で行くのか、臨床医を目指すのか、医師以外の選択で海外留学するかは定かではないが、ぜひもう一度挑戦したいと考える。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

佐賀大学医学部 6年 19211067 南里虎彦

初日のオリエンテーションでは、輔仁カトリック大学の学生達と一緒に先生のお話を聞かせていただいた。先生は「医師に必要なものは3つあり、一つ目は医療知識、二日目は医療技術、三つ目はコミュニケーション能力である」、「特にコミュニケーション能力は大切で、医療とは人と人との関わりであり、AIにはできない」とおっしゃっていた。佐賀大学の講義で先生から学んだ医師としてのあり方は全世界共通で、最も大事なことであったと改めて感じた。

また、初日は担当の先生とお会いして、患者さんの処置を見学した。患者さんの処置に関して質問したいことがあったため、英語で質問をした。医療に関する質問を英語でするのは初めてであったため、緊張したが、とても良い経験になった。また、その後は躊躇することなく、質問できるようになり成長を感じた。

外科見学ではセンハンスのロボット支援手術を見学することができた。センハンスを使った手術は今回の留学で最もみたかったものの一つだったので、見ることでとても嬉しかった。センハンスは触る感覚があるという点においてダヴィンチと異なり、その点においてダヴィンチよりも安全であると伺った。また、その際に台湾でのロボット支援手術の費用について伺った。台湾では、ロボット支援手術を受けるためには保険下においても50万円程の費用がかかると伺った。日本の場合は高額療養費制度があるため、10万円程度でロボット支援手術を受けることができる。このことから日本の保険制度はとても優れていると知ることができた。これからロボット支援手術が増えてくるため、この保険制度はとても重要であると感じた。

外科の実習では手術について先生から質問をされることが何度かあった。その際、医学英語がわからず、答えることができなかった。とても悔しかった。将来留学を考えているため、次回、留学する際に備えて、日常英会話に加えて医学英語で議論できる英語力を身につけなければならないと感じた。そのため、苦い思い出ではあるが、この経験は次に繋がるので良い経験になった。

救急の実習ではいくつかレクチャーがあった。レクチャーでは、頭部外傷について学んだ。英語で講義を受けることは今までなかったため新鮮だった。初日のレクチャーに関しては、私は先生がおっしゃっていることをほとんど理解することができ、とても満足感があった。しかし、2日目のレクチャーは超音波検査についてのレクチャーであったが、正直なところ、内容が難しく、意味の分からない単語が多々あり、理解できてない部分がい

くつもあった。一方、輔仁カトリック大学の学生は内容をほとんど理解しているようで、気になったことを先生に質問している姿がとても印象的で刺激を受けた。

また、台湾の救急に関しては、日本の救急と異なる部分もいくつかあった。特に、「一般診療と救急の違いは、診療の予約をしているかどうかである」というのが最も異なる点であると感じた。そのため、救急に来る患者は軽傷の方も多く、救急の入口でトリアージを行い、内科救急、外科救急、緊急救急に分けられ、治療・診察を行う。また、救急の患者が多い理由は、台湾の保険制度にもあり、保険により患者が容易に医療機関を受診できるため、軽傷でも救急受診が可能であるという特徴がある。これらの理由から、救急の医師は多くの患者を診るため、説明の時間があまりなく、どの薬を飲むのかについてや食事に関して気にしなければいけないことなどのやるべきことを書いた紙を患者に渡していた。患者に割く時間が少ないことは良いことではないかもしれないが、患者が何をすべきかがわかりやすいように紙を渡すのは患者にとっては安心できると感じた。日本と台湾の医療制度の違いを学ぶことができたことは今回の留学の大きな収穫であった。

休憩時間に輔仁カトリック大学の学生と話す中でも学ぶことがあった。特に輔仁カトリック大学の学生達が行っている勉強法がとても興味深いと感じた。台湾には日本にあるような国家試験用のテキストなどがあまりなく、勉強する際は Up to date のような医学論文を用いて勉強している。これを聞いた時、日本の勉強面での利便性に驚いたと同時に、台湾の医師は学生時代から論文に触れる機会が多いため、学術的に物事を考えられるようになるのではないかと感じた。また、学生の中には論文を書いている人もおり、負けてられないと感じた。

また、積極的な姿勢も学ぶものがあった。輔仁の生徒たちは先生たちからすべき事を与えられるのではなく、自分たちで学びたい事を見つけているように感じた。今後、研修医になったときに積極的に行いたいことを上級医に伝えていくことはとても大事であると感じた。そうすることで医師としての実力もつくうえにチャンスも広がると思ったからだ。

以上のように、今回の留学では各診療科で様々なことを学ばせていただいた。この経験を活かして、今後医学を学び、医療に携わっていこうと感じた。また、同世代である輔仁カトリック大学の学生からの刺激を受けたことも私にとっては大きな収穫であった。一方で、英語力不足や学習に対する積極性不足などの課題も見えた。課題を見つけることも今回の留学の意義である。今後、改善していこうと考えている。